View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

以日本学?者??象的?外???得 : ?字作???素?角的考察 [論文要旨及び審査の要旨]

著者	阿部 慎太郎
発行年	2014-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第527号
URL	http://hdl.handle.net/10112/8671

［26］

氏　　名	阿　部　慎太郎（あべ　しんたろう）
博士の専攻分野の名称	博士(外国語教育学)
学　位　記　番　号	外博第 13 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学　位　論　文　題　目	以日本学习者为对象的汉外词汇习得 －汉字作为构词素视角的考察－
論　文　審　査　委　員	主査　教　授　沈　　国　威 副査　教　授　竹　内　　理 副査　教　授　山　崎　直　樹 専門審査委員　名誉教授　佐　藤　晴　彦（神戸市外国語大学）

論 文 内 容 の 要 旨

阿部慎太郎氏の博士学位請求論文：以日本学习者为对象的汉外词汇习得――――汉字作为构词素视角的考察（日本人中国語学習者を対象とした中国語語彙習得――漢字を語構造素とする視点からの考察）は下記のように、本文 8 章とその前に序章があり、漢字、語彙データの分析結果をまとめた資料編から構成されており、章の下には節と項が設けられている。

序　章：関于日本漢語詞彙教育的現状和課題等
（日本における中国語語彙教育の現状と課題ほか）
第 1 章：関於語素教学法研究
（語素教学法研究）
第 2 章：語義推測方略研究
（語意推測のストラテジに関する研究）
第 3 章：日中詞彙表『常用漢字表』和『漢語水平詞彙與漢字等級大綱』
（日中語彙リスト『常用漢字表』和『漢語水平詞彙與漢字等級大綱』）
第 4 章：字形教学
（字形の教育について）
第 5 章：詞彙教学（一）：漢字（語素）の段階）
（語素教学法（一）：漢字（語素）の段階）
第 6 章：詞彙教学（二）：詞彙段階
（語素教学（二）：語の段階）
第 7 章：詞彙教学（三）：分析、考察
（語素教学法（三）：分析、考察）

第 8 章：以日本人漢語学習者為対象的詞彙推測調査
（日本人中国語学習者を対象とした語彙推測に関する調査）
資料編

中国語の書記単位は漢字である。漢字は音節、形態素、語という 3 つの側面を持ち合わせている。中国語の常用漢字は 2,500 字とされ、準常用漢字 1,000 字を加えると 3,500 字となり、一般の社会言語生活は、この範囲内で営まれているとされている。一方、中国語と同じく漢字を使用する日本人学習者の場合、「新常用漢字表」にある 2,136 字＋αの漢字を知っていると考えられる。非漢字圏の学習者より中国語学習において非常に大きなアドバンテージであると言える。しかし、多くの場合「中国語の漢字（語）」≠「日本語の漢字（語）」であるため、漢字の知識があるということが、日本人学習者にとってメリットだけではなく、マイナスに作用する場合も多いということを十分に考慮しなければならない。

一般的な成人の場合、母語において約 4、5 万もの語彙量を持っていると言われ、その語彙知識は常用語から専門用語まで多岐に渡っている。しかし、第二言語学習者が母語話者と同等の語彙量を習得することは難しい。そこで、第二言語の場合、特に常用語を優先的に学習することが効果的である。『漢語水平詞彙與漢字等級大綱（修訂版）』（（2001 年 6 月に公表、以下、HSK 語彙と略する場合もある）には、この常用語に関する調査報告がある。「前書き」（pp.12-13）によると、常用語 3000 語レベルで、一般的に用いられる語彙の約 86%、8000 語レベルで約 95%をカバーすると報告されている。8000 語もあれば問題なく中国語の文章を読み、中国人とコミュニケーションすることができると思われる。しかし、一言で 8000 語と言ってもその習得には長い時間を要する。8000 語どころか、日本の高校及び大学における（特に第二外国語としての）中国語学習者の大半はシラバス通りに授業をこなしても 3000 語レベルに到達していないのが現状である。では、なぜ語彙指導により多くの時間を割かないのかという疑問に直面するが、日本の高校及び大学の中国語クラス（中国語を専門としない第二外国語履修）は、「週 1～2 コマで 1～2 年間」が最も多い（「序論」参照）。この中で、文法や発音指導も同時に行わなければならず、その結果、語彙学習に割く時間を削るという負のスパイラルに陥っているのである。

語彙量を増やすためには、学習時間を増やすに越したことは無い。しかし、どの学校も学習時間を今以上に増やすことは現実問題として困難であろう。そこで、「限られた授業時間の中でいかに効率よく語彙量を増やすか」というのが、今日の語彙習得研究に課された大きな研究課題であり、中国語教師としての使命でもあると阿部さんは考え、関連する研究を始めたのである。

上記の問題を考える中で、阿部さんは、呂文華（1999）を始めとする“語素教学法（語素教育法)”という考えに注目した。この「語素教育法」とは、語の構成素である「語素（＝字)」を学習することで、その語素が核となり効率良く語を学習できる、という考えである（1 章参照)。さらに中国語の語彙単位は分かち書きをする英語などと違って自明なものではない。古代中国語においては 1 音節語がメインであったが、現代中国語では複音節化が進み、常用語の 7 割が 2 音節語であり、3 音節以上の語も 2 割強あり、多音節複合語が語彙の中心となっている。したがって現代中国語の語彙学習においては、漢字 1 字 1 字を知っているだけでは不十分であり、その漢字が語素としていかにそれより一つ上のレベルである複合語を構成するかを知らなければならない。従来のように個々の語、或いは個々の漢字を覚えることが中心の語彙学習では真の意味で中国語が「聞ける」、「話せる」、「書ける」ということにつながらないことは、中級レベル以上の学習者にとって明らかである。

以上のような現実を踏まえ、阿部さんは、185 ページに及ぶ中国語の論文では、中国語教育において語彙学習の単位を個々の漢字や複合語だけではなく、語素教育という概念を中国語の語彙学習の過程に導入し、それにより効率的な語彙学習法の可能性を理論面と実践面にわたって検証した。

阿部氏の考察によれば、今の中国語教育の現場では、語彙は語の単位で意味を提示、学習するのが一般的であり、語素の意味を提示、指導する教科書は少ない。また、語素の指導書、指導法も存在せず、教師個人の力量に任せられているのが現状である。そのため、阿部さん自身も、これまで学んだ知識をもとに、独自に語素を指導することはあるが、果たしてその方法が本当に効果的に提示、指導できているか日々模索しており、常々語素に関する教授法の必要性を感じているという。このように、語素を「語素教育、教授法」という視点から見た場合、研究の余地が多いにある分野であり、今後の中国語語彙教育にとって大きな役割を果たすのではと阿部さんは考えた。

語素教育は、中国国内の対外漢語教育を中心に研究されているが、いまだ体系的に確立された研究は見当たらない。語素と一言で言っても、「意味の多義性」、「自由、拘束語素」など、極めて複雑な問題があり、一方向からの見解で考えることはできない。また語素は、語の中で使われる場合にはさらに意味が不透明になりやすく、同時に語素と語の関係性の問題も考慮しなければならない。

また、先行研究の多くは、非漢字圏の学習者が対象で、漢字圏の日本人学習者を対象とした場合、これらの結果とはしばしば合致しない部分が生じる。阿部さんは、博士論文では、日本人中国語学習者の特徴、問題点に特化した語素教育法を考察することとしたのである。

さらに、教育法として考える際には、「指導語素の選別」が極めて重要な内容となる。漢語の多くは「一字一語素」であるが、例えば二字語では単純に倍の語素が存在する。よって、語素を学習することは語の単位で学習する倍の時間がかかる計算になる。そこで、語素教育研究では、各学習段階において、「どの語素を教えるか」、さらには「どの語素を教えないか」という選別が必要になる。これまでの先行研究では、この点が比較的軽視されがちであったため、阿部さんは論文で特に重点的に考察した。

阿部さんの研究は、これまでにない日本人中国語学習者に特化した教育法研究であり、先行研究では指摘されなかった新たな視点や、多くのデータ分析及び調査によって、より教育現場で使える教育法研究になったと指摘しておきたい。いうまでもなく阿部さんの研究には、まだ多くの課題も残っている。

前述したとおり、阿部さんの論文は、資料編を除けば、全 8 章で構成されている。序章において、阿部さんは、漢字、語素、語彙データの収集方法等について紹介し、それによると中国の大学等の研究機関によって公開されたコーパスや義務教育段階の国語教科書を活用したと述べている。

第 1 章から第 3 章では先行研究に対する詳細な検討を中心に問題点を明らかにした。第 1 章は「語素教学法」で、中国語語彙教育における語の単位の問題に考察が加えられた。阿部さんは外国人学習者の語彙習得の指標となっている『HSK 漢字語彙大綱』について、多角度からの分析を加え、日本人学習者にとっての問題点について論じた。阿部さんは中国語研究と教学における語素と漢字教育の研究史と現状について考察を加えた。

第 2 章は「語彙の意味推測」に関する内容である。阿部さんは英語教育における未知語推測の実践例や英語と中国語の相違点、推測成功の可能性について考察した。

第 3 章は、本論文における日中漢字の基準となる『常用漢字表』と『HSK 漢字語彙大綱』に関するものである。中国語において二字語の定義は難しく、これが定まらなければ、本論文の分析結果にも大きな影響が出る。そこで、3 章において本研究における二字語の定義を実情に即して考察した。

第 4 章は、本論文の核となる語素教育研究の前段階として、日中の「字形、字体問題」について考察した。日本人中国語学習者を対象とした場合、日中の字形、字体差が重要な問題となる。例えば、日本漢字「楽」と中国漢字“乐”は、通常「日中同形字」と判断されるが、日本人にとって、初見では「楽」と“乐”が同形であると認識するのは困難であろう。このように日中で字体差が大きく、日本人が同形と判断できない字は、日本語の知識を効果的に活用できないという事になる。そこで、語素教育を考える際、この字形、字体問題は軽視できない重要な要素となる。4 章では、この字形、字体問題を深く突き詰めて

議論した。

第 5、6、7 章は、本研究の主題となる部分で、語素教学法という視点からの考察である。語素の問題は、大きく 2 つの異なる段階から問題点を考察する必要があると考える。1 つは、語素単体での問題であり、語素には「自由、拘束語素」や、「多義字」問題など、様々な要素を考慮する必要がある。この問題は 5 章で考察した。また、語素の問題を考える際、単体での問題に加え、複合語の中での使われ方、語素と語の関係性も重要となる。漢語の語構造は非常に複雑で、語素から語へアクセスする際、どのような意味の変化が起こるかは、重要な問題であろう。こうした語素と語の問題は、6 章で考察した。

そして 7 章では、5、6 章で考察した問題を踏まえて、いくつかの語素を例に、各語素を詳細に分析、考察し、実際の指導時に起こりうる問題や注意点を考慮し、独自の指導法を提示した。

最後に 8 章では、2007 年及び 2012 年、大学生を対象に行った語意推測調査の報告である。7 章までの理論的な考察から多くの問題点を指摘できるが、実際に学習者を見ていると、理論的考察の結果では測れない「想定外」にしばしば直面する。こうした「想定外」の問題点を見つけ出すには、学習者の生の声に耳を傾けることが必要であると考える。そこで、8 章では調査によって理論的考察では把握できない問題点を見つけ出すと同時に、理論的考察の信憑性を高めることを目的とした。今後の課題として従来のような単語をベースにした学習方法では、学習者はどうしても意味を覚えることに集中してしまう。ようになるという阿部氏の結論は説得力がある。

本論文では、「資料篇」を設けることとした。本研究では、様々な角度から大量のデータ分析を行ったが、本文中では、紙幅の関係上、結果の数値（%）及び一部の例を提示するに留まっているが、現場での指導ではこうした数値はさほど重要ではなく、むしろ具体的に該当する語素及び語彙がどのようなものかを知ることの方が重要である。そこで、「資料篇」では、本研究のいくつかの重要な分析結果に該当する語素及び語彙を一覧で提示した。これらは、教師向けに指導時の参考資料の一つになることを想定して作成したものである。

阿部さんの論文の最大の貢献は、中国語語彙学習の単位を個々の単語のみならず単語の構成素にもっと注目しなければならないことを提唱し、そのための理論上、実践上いくつかの問題を明らかにしたことにある。本論文で得た知見は、今後の中国語語彙教育における新しい教授法の開発に繋がっていくものであると信じている。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

論文の提出に先立ち，提出要件審査委員会（委員：沈国威，山崎直樹，八島智子）は，阿部慎太郎氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうかを確認した。その結果，同氏は，一）必要単位（8 単位）を取得済みであり，博士論文のテ− マと関連する分野で，二）論文 3 編（うち査読あり中国の学会誌掲載論文 1 編を含む），三）口頭発表 4 回（うち国際学会 2 回，全国大会 2 回）を有し，四）博士論文聴聞会（平成 25 年 5 月 25 日）も終え，論文提出のすべての要件を満たしていることを確認したため，研究科委員会（平成 25 年 7 月 24 日開催）に報告し，同氏による論文提出の承認を得た。これを受けて平成 21 年 9 月 30 日までに阿部氏から提出された論文を学位請求論文として受理し，研究科委員会（平成 25 年 10 月 23 日開催）において承認された論文審査委員会（主査：沈国威、副査：竹内理、山崎直樹、学外委員：佐藤晴彦）での審査に入った。

提出された中国語論文（本編 185 頁、資料編を併せた総頁は 396 頁）は、本報告書「1. 論文内容の要旨」において述べたように，中国の HSK 詞彙大綱をはじめ、日本の各種漢字表等の関連資料を徹底的に調査し、語構成の立場上の意味、機能を精密に検討していた。また参考文献に記されたように最新の研究成果もふんだんに取り入れている。これらの大量の文献・資料を綿密に分析し，日本人学習者にとって効果的な語彙学習法、習得すべき語素のエントリーがどのようなものかを明らかにすべく実証的に研究を重ねてきた。語彙教育に対する問題意識の在処、研究手法の堅実さは評価に値する。また巻末に付されている資料編から明らかなように教育現場での課題に対して積極的に答えを出そうとするものであり，阿部氏の教育者としての自覚の高さが窺える。

本論文は、中国語の語彙学習について新しい視点からのアプローチを試み、日本人学習者にとって効果的な語彙学習法を確立すべく理論と教授法の両面にわたって考察する意欲的なものである。

さらに次の3点からも，本学位請求論文は，優れたものと判断することができる。

（１）日本人にとって効果的な語彙教育の将来を見据えた問題意識：これまでは明確な形での取り扱いをされていなかった漢字、語素、複合語という成分を連続體として語彙教育に導入したこと。

（２）研究手法の堅実さ：入手できる漢字表、語彙学習資料を駆使し、綿密に調査していること。

（３）語彙教育への応用：未習語の意味推測の方法を含む本論文の結論、調査結果が語彙教育の現場において応用が期待できること。

以上により，阿部慎太郎氏の論文が，研究の方法や内容，記述の体裁や論理など，すべてにおいて所定の水準に達しており，博士論文としてふさわしいも

のであることを，論文審査委員会一同が認めた。